

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

# 無碍の一道 第89号

発行：2023年7月15日

発行者：浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺

住職 天野英昭

〒739-0147 東広島市八本松西6丁目10番1号

TEL・fax (082) 428-1360

## 盆会法座

日時 8月1日(火) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~11:30 昼席 13:00~15:00

ご講師 山下瑞円 師(岡山県高梁市成羽町 浄福寺副住職)

## 秋彼岸法座

日時 9月19日(水) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~11:30 昼席 13:00~15:00

ご講師 前田 純代 師(広島市西区己斐 善法寺坊守)



## 磯松天龍寺墓苑並びに合同墓(永代供養墓) お盆のお参り

日時 8月12日(土) 18:00~19:30

## 磯松天龍寺墓苑合同墓秋彼岸法要 お彼岸のお参り

日時 9月23日(土) 15:00~16:00

※ 大変お忙しい時期とは存じますが、多数のご参拝を念じ申し上げます。  
但し、天龍寺墓苑での合同参拝は、関係者の方のみとさせていただきます。



## 第130回歎異抄輪読会

日時 7月20日(木) 14:00~15:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、参加は自由です

縁(ゆかり) カフ

エ



★天龍寺仏教壮年会 月例会 7月31日(月)

## 50代の半ばにこのようなことを書かせていただきました。Ⅱ

その考えで生きていくならば、老いも病むことも死ぬことも一つの過程に過ぎないのかもしれませんが、しかし、お浄土の世界は人間の五感を超えた世界ですから、天龍寺は何を言っているのかと疑問などを呈する方も多いと思います。この様なお話をした時に、ある方がこの様な事を言われました。「生きているだけで良い。生きるために生きているんだ。」確かに言われることも、ごもっともと思いましたが、自坊に帰って考えますと、生きるために生きるのであれば、陸上競技の同じトラックを毎日何度も走っていることと同じなのかもしれないと思う事がありました。昔「およげたいや焼き君」という歌がありましたが、そのフレーズの中で「毎日毎日ぼくらは同じ鉄板の・・・」偉そうな言い方ですが、走り続けて力尽きた時に、死を迎えるのかとも考えたしだいです。オウム真理教の麻原氏に帰依した信者の方は、世間的には高学歴の方が多く入信されたとマスコミ等の報道であったと記憶しております。私は、何故にその様な人たちが、倫理的・道徳的に見ても明らかに逸脱している教えに入信されたのか疑問でした。ある本の中で、ある信者の方が入信した理由について、以下のように書いてありました。それは「麻原氏だけが、自分がこの境涯に生を受け、意味・意義・目的等をきちんと教えてくれた」という内容でした。その文章にも記してありましたが、人間は本当に喉が渇いたら、どぶ水さえすすめるのかと思っただいす。自然界に目を向けますと、木・草等は生を受け、成長し、時間と共に枯れていき、この境涯から消滅していきます。それに対して何をするわけではなく、ただ自然の営みに身を任せています。私たちは何のためにこの世に生を受け、何のためにこの様に苦しみ・悩み・悲しみに出会い、そして何のために老い、何のために病み、何のために死んでいくのでしょうか、どこに向かっていく存在であるのでしょうか。一日一日の一步は何のためになのでしょう。それは往生極楽に向かっていく一步なのだと思われたいと親鸞聖人は優しくお示しなさっていると思うところでございます。

しかしながら、この様な事を言いながら、「後生の一大事」と言いながら、「今が一番大事」な存在であり、本当に今の生き方が正しいのかと心が揺らぐことが、度々あります。その様な時私はいつも歎異抄の第2条の「おのおの十余箇国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽のみちを問ひきかんがためなり。・・・」この言葉で、勇気づけられます。私たちの先人が命にかえても求められた物は何であったか。この章を思い出すたびに、そうであったと思っておすところ。当山では毎月歎異抄輪読会をさせていただいております。その中で松田先生はよく歎異抄を覚えなさいと言われます。その言葉が心深くしみわたり、日頃の自分の生きてく指針・支えになってくるからだとも言われます。先生はこれもよく言われますが、自分が困難に遇い、どうして自分がこの様に苦しみ・悩み等を受けなければならないのかと思う時に、歎異抄の第1条の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて・・・」という文が思い出されると言われます。そのたびに自分は救われているのだと、はたと感じ「南無阿弥陀仏」と称えまると言われます。また、歎異抄の前序に「耳の底にとどむるところ、いささかこれをするす。」という文があります。唯円さんは親鸞聖人からそれは多くの事を教えられたと思っております。その教えられた事が、時間と共に自分の心の中で浄化され本当に耳の底に留まる事を記されていると思っております。まさしく親鸞聖人と唯円さんの魂だと思っております。それ故に一時封印されても時代が真実を求め、世に出たと感じております。普遍的な真理・真実・美等は時代に淘汰されず、必ず世に出てくるものだと思っております。絵画の「モナ・リザ」も良い例だと思っております。今の一步は何のためか、どこに向かっていくのか、自分は何のために生を受けたのか、不思議と寺に生を受け、寺を継がないと母を困らせ、それでもこうして浄土真宗にご縁をいただいている私が、しみじみと感じる所を述べさせていただきました。最後に親鸞聖人は約90年の人生をかけて何を求められたのか。まさしく「生死いづべき道」「生死解脱の道」もっと簡単な言葉で言えば、「相対・有限を超えていく道」を求められました。浄土真宗にご縁をいただいた私たちがどのような生き方をしていけばよいのかという答えを親鸞聖人の歩まれた生き方から教えられるのではないかと、これもしみじみと感じるところです。さらに願わくば、親鸞聖人のようにこの世に生を受け、ご本願に遇わせていただいたことを慶べれば幸いかと存じます。